寺井氏

夜半翁終焉記

晋明氏

夜半翁終焉記

おしてはや浪速にちかき鳥りて
生ちてとかゝる時あつるのかしよ美くの乃
事秋を送り於奥乃隈し遍歴して
うちひさす都を終の栖とちかゝ
れもつ事なくてやはまとよはの浦
天の橋立乃ちかゝりよ三とせの月雪を
形のめ力い花俗よ帰りて谷中茂

与謝とゝあるゝ人され心抑は翁
むけよいもけまゝ画を好み
年を積み南北二宗を寫得終り
筆あゝと墨あるのみ
もし弱冠の比より俳諧を耽り
蕉翁晋るの高邁を慕ひ
諸家の大流より縱横自立する
集て大成すもいまし明和のもの

京師より再び先師巴人の業をうけて
夜半亭とゝし花守の身ゝ弓矢ちの事
つゝしむあるあり其風調をうけ
腹を倒して門に入るかゝる地も
天未習俗より解し事を感ずの
癖あれをなして世人と交ゝ
もたゝしと門戸をとゝ画室にこもり
ゝたゝまに調の徒と志を通し意を適す

拙い人として中くよひとまあれそ月ち友
素よりも老懶墮ちてい一りも老ぬ
當（マサニ）養壯（サカンナ）ノ頃ハ伏波の軍の語を忘れず行住
座臥毅再衣食ハ終てもの腹饉（ルコヲ）鑠哉是翁やと
人もう者中丹作りかりて平あの致景をたし
東郊西山の花ふもも乃ふさ書こと
秋の末の人毛除ハ指れ宇治の奥田原とか
別て秋と思絶壁懸河奇石怪岩ハ眼を
よろこしめて　帛を裂琵琶の声や枕の声

是ハ白氏の琵琶引一聲如裂帛ヲといへるり
思ひ出しとをかくてその秋も暮冬枯の
空もたちかちに蟋蟀幽庭の声ハ
朝夕の風夜をとゝまりひとも仏ふく
気力あかく素服痛老を苦しめ日毎ハ
悩みかちちあれおもやと人く訪ひよりて
服薬ハ重ねく仏抱大切ちく重もて
かつて丈侍ひ也されと老病日増り篤く
醫療さ方くまゐを用ふい（ともなれ除）

たの〳〵菴はよあつまりてかゝるく
病床よりとゝかうさま老情を
慰め侍りし或時平俗枕上より招ぎて
はちゝ病苦の祈さめるも五車万古集の序の
こと及すゝ仏ハ手震ひ心惑ひぬれと
からくして筆とりもとく維駒より伝へて
父の書遺の志を矢へかゝ書とゆゝしる
こゝ仏を生前筆の採おさめ了て

いらちなる台俊父子かゝ周縁の俳かゝ書
彼集て愧さるるのあるとかゝさを今更よ
感し侍りも又あるを加のものゝ射て
かゝやゝの病を解侍も好るるの引ちゝて
句集よりゝんとするゝ受の枯地をけ過
ちをいへる境及ふるとも覚ぬ侍れも
蕉翁の憂練ちる所今さし感て
侍さるおちを自化よりぬむつまし教の

もしかゝみるやちのもせんとひと度はこゝ
一ゝひゝ胸すゝかりかゝりかくて十二月半の
日来也病毒下痢して猶と悩ゝ給るよ
似れも食気欲なるちく四身倦骨小て
日毎ゝゝのみすゝちくゝ足えらるを打よりて
唯命運を祈ゝるちかりし妻姫乃
人ゝをさしめ月僕梅亭の軍旦暮
起臥を扶て師匠はかゝまるの志切
ものも

廿二日三日の夜ハてにうちゝめきておいたよを
いと仏細ゝおほつゝ附ゝて痛部を伺ひて
後のゝちをいさゝかほのめかし笑えれも
いやゝゝ作らゝ来ゝかゝをおもゝて
野総奥羽乃倡鄙ゝあるてハ途ゝ
炎ひある所也飢も寒暑ゝちかみ
う丈旅乃ゝ様ゝ命作れちゝかゝ歩きめ足も
あまゝゝひちゝ内しゝ今日帝都ゝ居を

安一さうく病の抱さまといふも五葉
おのれらなる者人らのまことを尽し
孫のゝ抱もいと珍しくせの繁り
あさかゝさかりされど世づかぬ姫ちくず来
るを与れ〳〵されど世づかぬ姫ちくず来
なと賞翫なきもあゝねとなくん
後いそこら三三五五語もあらんあやあや
なふたの事も欲念の妨なるいとものし

うちかつきて答へちらんもせんまゝなくて
うつくしまれ居り世間の石ゝ病体いと
主代ゝ言語も常ならず春月渓を
ちかつけて病中乃堂あり いと年
る一しと笑まるるを やうを筆記料物
やゝのあとなる物語 あはれ〳〵く
て吟意を窮ふり

冬学むかし 王維の垣根か

等中納言のこゝをつかす爲のしも
とゝきこえたゝ拾ユ書のやゝはしる
あまて又

白梅

こゝ初春と題を主人をこの
言句を生涯詩の仏とし聽ルなく
俗塵正念すゝめてゝ生涯を
ひとり世の歎ゝいつもさてをし

けれとも豆のはかちゝ附添あ
ともから鴨をゝ足すをすしとも
をのかひをゝやゝて陸の戸敲きする
刻と告るを田福百四郎則佳棠賀墓
素秋魚官集馬そのの歌ゝ人ゝも
須臾を池あつまりて生前のむつひ
死別のひんなさかゝ方にいろ
こゝとの葉もかゝて唯よゝと伝ふゝ

さてゝ毛あるゝまゝ事ちゝねと兼て
遺言まうせ病床の枕もとを掃ひ
きよき毛氈をしき其上に恒乃
衣服乃垢つかさるを撰ひて襟のいたくろひ
居る衣を脱ひ紬帷を着ゝ
生る人のごとく拵ひらゝて部屋
布服部ゝて香を焚筆を供し
寺僧をむかへ各唱名念佛ひそうり

亡骸をけつあとちゝぬ佛も世の中も
とのいをきき書のてゝふきを待折か更
ちれいをよちきき人乃いとをさまゝ
あるいもものいまひせん人の耳もきき
新ちゝもあのちゝるしをして先病中
の佛ゝてちゝ書ゝちて松飾とり
れのころ世の人ゝよい拵家ゝ佛され
隣國近郷乃門人ゝ足を空ゝ弦あゝ

親族朋友知己舊友門庵所せまて
とりひろまて正月廿四日葬式
義信をとむらひ〳〵送骨ハ金福寺ちる
芭蕉庵の墻外ニとりおさめかゝしのてき
卵塔を建 永く蕉翁の遺魂まもらしむ
枝も死して得ぬとそせん枯尾花と
かひなしや山の住居幽景をこそやまん
しかハ新芳乃御上ゆゑ拙鶴乃

衡宇をとる山沢の長田家の
おのつから生業の西岡ハかよりする
東嶺ハ月をとこしなへ法乃
燈を照し前載の桃ハいとことて
ふかひて不断の花を持もかなを
なを奇縁ハ絶正当のあ花
まをもて遂ハ山ほを偏る同門の
人〳〵懐旧追慕の便ともなるとし

愚詠の葉をとり侍り五七日をいとはず
あつまりてこの所ちり侍る花設老師の
魂を祭るものなるべし

儿董謹書早ハシヲ

於洛東金福寺開下

澤田文庫